

令和2年度 第3回兵庫県公立大学法人評価委員会 議事録

1 日時及び場所

- (1) 日時 令和2年10月12日(月) 14:00～16:00
- (2) 場所 兵庫県庁2号館「参与員室」

2 出席委員

今村委員、河村委員、高崎委員、前田委員、牧村委員長

3 出席職員

戸梶企画県民部長、渡瀬管理局長、野北大学課長、井上大学振興班長
川目県参事、日光専門職大学準備室長、吉岡専門職大学準備課長、一二三
専門職大学準備課副課長

4 内容

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 議事
公立大学法人兵庫県立大学第二期中期目標変更案について
- (5) 閉会

5 意見交換の概要(●:委員、○:事務局)

- 民間は利益がなければ事業を継続しないが、公の事業は異なる。これまでの大学にない新しい試みということで、世間のニーズをしっかりと捉え、実現可能性を見極めていく必要がある。国公立大学で初めて本格的な演劇を学ぶことができる大学であると謳っているが、私立大学であれば、演劇を学ぶことができる大学はあるのか。
- 主な私立大学として、関東では桜美林大学があり、西日本では四国学院がある。
- 演劇を高等教育として行っていないのはなぜか。
- 専門学校であれば、俳優養成等のスキル教育を行っている。一方、高等教育となれば、スキルの部分とアカデミックな部分が融合しなければならない。教員のキャパシティがスキルのほうに偏りがあるため、人材の確保が厳しいという点がある。
- 教育プログラムとして留学も考えられているが、海外では高等教育として実施しているのか。
- ヨーロッパやアメリカにおいて、高等教育として演劇を学ぶことができる。

韓国では、卒業生が韓流ドラマを制作し、輸出産業にまで高めている。

- 大学の名称が国際観光芸専門職大学から変更された理由は何か。文部科学省から指示があったのか。
- 大学の名称から国際をとるように文部科学省から指示があったわけではない。学問分野として芸術文化と観光を設定した段階で、観光では今やインバウンドが当たり前となっており、演劇でもグローバルに活動することが一般的になっている。そこで、国際というキーワードをたてなくても、芸術文化と観光の分野の中には当然のこととして含まれるという整理の仕方に変更した。
- 学生が芸術文化と観光のいずれかを主となる専攻、他方を副となる専攻として両方を学ぶカリキュラム設定にしたことについては県の狙いが入っているのか。両方を融合することは難しいのではないか。
- 一つの学問分野に依拠するだけでは、これから100年先を見据えた場合、プロフェッショナルを育成するのに適当ではない。全く異なる分野を融合することで新しい価値を生み出すことが根幹にある。委員ご指摘のように、高校生にそこまで理解が及ぶかという点を心配していたが、オープンキャンパスで両方の模擬授業を受講してもらい、事後のアンケート調査の結果では高校生の理解が進んだと感じた。高校生側のニーズに対応して、芸術文化と観光の双方を融合したわけではないが、これからは分野を架橋する力が必要である。しっかりと教育をしていけば、我々が求める人材を育成することができる実感している。
- 最初は、芸術文化と観光の2つのコースにするという議論もあったが、双方には親和性があることが分かった。新たな価値を創造する人材を育成するためには異分野融合が必要である。観光のプランを考えるときに、芸術文化をコンテンツとして持っていればプラスアルファになる。他方、芸術文化においては、どのように集客し、コストを抑えるのかを考える必要がある。そこで、芸術文化及び観光のいずれかを主となる専攻、他方を副となる専攻として、両分野を体系的に学ぶカリキュラムを構築した。
- 一般の大学以上に就職率が問われる。昨今の新型コロナウイルスの影響により、観光業界もエンターテイメント業界も厳しい状況にある。開学してから4年経ったときに結果がでるが、4年後にインバウンドが元の水準に戻っているのか予測もできない。学生の立場からすれば、人数の枠という制限があり、自分が希望していないほうの分野に進み、就職もうまくいかなかったということに直面する可能性もある。4年後の出口も見据えて対応できるようなカリキュラムになっているのか。
- 学生が専攻を選ぶのは2年生になってからであるが、一定の基準を満たし

ていれば3年生で進路変更をすることは可能である。芸術文化と観光の専攻を希望する学生が半々になることが望ましいが、一定の偏りを前提としてカリキュラムの設定をしている。学年進行ごとに、GPA、学習態度、アウトプット等を判断材料にして、クラス担任と相談しながら決めていく。残念ながら、希望が叶わない学生が出てしまうが、それが突然生じるわけではない。両分野を学ぶため、希望していないほうに進んでも、もう一方を自分のテーマとして持ちつつ幅を広げて勉強してもらい、学生のキャリアを応援していく。

- 毎年卒業する80名の就職先が重要である。安定的な就職先を確保できるのかも大きく影響してくる。半年前と今とでは大きく状況が異なるので、非常に心配である。今後策定する中期計画等で十分に対応できるようにしてほしい。

- 観光業界は非常に厳しい状況にある。先のことは分からないが、観光交流は絶対に復活すると信じて取り組んでいるところである。

大学の特色として、演劇手法を用いたコミュニケーション能力を培い、観光に活かしていくということで、デザイン思考に関わってくると思う。商品の企画にはストーリー性が求められる。これまで旅行であれば、旅中が中心であったが、旅行に行く前、行った後も含め、どのようにトータルコーディネートしていくのかが大きな課題となっている。芸術文化を学ぶことがプラスアルファになればよい。
- 演劇においては、演じるだけではなく、舞台装置からチケット販売まで一連のことを学ぶということで、ストーリー性が重要となる。また、コミュニケーション能力を身に着け、いかに観客を惹きつけるのかなど、芸術文化を通じて学ぶ。観光であれば、おもてなしや旅行プランの企画に活かすことができるのではないかと考える。
- ウィズコロナの時代において、デジタル基盤の上にヒューマンの価値を載せていくことが必要となっている。IoTの勉強もするということであるが、出口を考えたときに、デジタルリテラシーが身につけていないと厳しい。研修でJTBにもお越しくくださるが、OTAに行くこともプラスしていただければ良いと思う。
- ICT演習において、情報処理やデータサイエンス演習、地域情報論を設けている。観光面では、これからの事業を考えていく土台として学ぶべきことであるので、専属の教員を配置し、様々な科目を用意している。パソコンは全員の学生に配布し、Wi-fi環境も整備し、ICT環境のもとで実践的な学びができるよう力を入れていく。

- 実習をしていく科目はプロジェクトマネジメントに近い。社会に出たときに、稚拙であってもプロジェクトマネジメント力がなければ、使える人材とは言えない。しっかりとやっていきたい。
- 観光には発地型と着地型があるが、どちらかという到着地型、すなわちエリアマネジメント型については充実している。出口を考えたときには、両方を知っていることが必要不可欠である。エリアマネジメントとツーリズムの考え方を取り入れていただきたい。
- 我々は、地域の人を巻き込んで地域の活性化を図っていくということで着地型観光に関わる人材の育成を考えていた。旅行会社で考えられている発地型観光についても、地域にある潜在的な資源を見出して特徴的な体験ができるという旅行商品をプランニングできる人材も育成していきたい。旅行会社での実習も踏まえて検討していきたい。
- グローバル化を考えたときに、プロジェクトマネジメント能力が欠けている。
- 海外のプロジェクトについて、現在具体的なものはない。今後海外の大学と協定を締結し、連携した取り組みを行っていきたい。アートマネジメント分野においては、アイルランドやドイツでの実習を考えている。観光分野においては、アメリカや台湾での実習を検討している。文部科学省から設置認可がされ、来年4月の大学開学と同時に具体化していきたい。
- 出口戦略については今後検討されると思うが、変化が激しい時代であるからこそ、臨機応変に対応できるようにやっていただきたい。
- 県立大学と専門職大学の2つの大学をアンブレラ方式で運営していくとあるが、県立大学とはどのような連携をしていくのか。
- 県立大学も豊岡にキャンパスがあるので、県立大学の教員が講師となって専門職大学の授業を実施することを検討している。
- 経済・経営の観点は県立大学のコアの部分である。どこまでできるかは分からないが、オンラインも含めて教員の相互交流も検討していきたい。
- 単位互換も考えているのか。
- 現段階ではそこまで具体的にはなっていない。教育・研究の面において、県立大学と交流はしていきたいと考えている。教員だけではなく、学生が県立大学に行って講義を受けることも考えている。オンライン授業も活用していきたい。法人が別々であれば協定等を結ぶ必要があるが、1法人であれば交流はズムーズにいくと思われる。
- 中期目標に記載されている両大学間の連携の部分には、情報共有と経営資源の相互利用しか記載がないが、アンブレラ方式による運営体制をとる意義をもっと明確にする必要がある。中期計画に落とし込む段階で具体的な施策

が出てくると思うが、アンブレラ方式のメリットを中期目標に記載すべきである。

- 1点は教育面での連携・交流による相乗効果の発揮である。もう1点は、管理運営面である。別法人とすれば、コストがかかる。小規模な大学を単独で運営することは難しいため、効率的な運営という観点から大きな効果がある。例えば、事務組織の連携、情報システムの一元化が実現すれば、コストや人員を削減することができる。兵庫県の厳しい財政状況に鑑みても、アンブレラ方式による運営がベストである。
- 2点目のメリットは行政側からすれば非常にわかりやすい。この点を中期目標に明確に記載すべきである。また、全県にキャンパスが点在する県立大学は、遠隔授業も含め、キャンパス間の交流を行ってきたノウハウを持っている。県立大学が培ってきたノウハウを専門職大学にも波及させていくべきである。
- 委員のご意見は非常に重要な観点である。分散型のガバナンスをどのように組み立てるかについて、これまでの県立大学のノウハウを専門職大学にも適用して、より高いレベルの分散型統治を実現していければよい。
- 新しい大学をつくるということで、地元や県、様々な方面からの期待があると思うが、専門職大学の軸をどこに置くかが重要である。軸がぶれると、どこに向かっているのかが分からなくなる。

目標には世界に通じる専門職業人の育成とあるが、グローバルの質を担保できる内容が伝わってこない。観光分野で英語は必須であり、多言語を含めどのような展開にするのかは重要である。今後留学生の受入も考えていると思うが、そのあたりはどうなのか。APUにおいても、観光学部の構想があり、厳しい議論があった。マネジメント系とツーリズム系のどちらを目指すのかで意見が分かれる。日本の観光学部は、立教大学や和歌山大学などほとんどが社会学系である。ホテル経営を学ぶのであれば、5つ星系のグループとの連携も考えていくべきである。アジアには、北京電影学院をはじめ、秀でた大学がたくさんある中で、専門職大学は何で勝負するのかもっと掘り下げていかなければ、ポイントが見えにくい。象徴的なものは就職であり、外資系のホテルに入るのか地域の観光業に従事するのか、どこに焦点を置くのかが大事なポイントである。

入試制度をみると非常に一般的である。芸術文化のプロフェッショナルを育成するのであれば、才能を集めるという考え方が必要である。学力試験中心で芸術系の才能が集まるのか疑問である。平田オリザ先生を学長に迎えているにもかかわらず、発信力が弱いのではないか。

大学の英語名称や略称をどうするのかを検討する必要がある。ブランド力

や認知度を高めるためにも重要である。芸術文化観光専門職大学では印象に残らない。芸術文化と観光の融合というユニークな展開をしているのであるから、知恵を絞って、APU や ICU のように、学生から愛されるような名称をつけてほしい。

- どこにフォーカスをするのかについて、ジョブ型雇用が関連する。現時点では、卒業生のジョブ・ディスクリプションを描けていない。専門職大学である以上、今後長いスパンで見たとき、そのあたりも見据えていけないといけない。ホテルマネジメントをするのか、地域に入るのかによっても大きく違う。

入試については、小論文、グループディスカッション、面接で適正を判断していくが、発信力は弱い。大学のブランディングにおいても、新しいフィールドを開拓していかなければならない。

- 社会に発信するときは芸術文化と観光を2つに分けないと難しいのではないか。
- 学位名称は Arts and Tourism であるが、コミュニケーション戦略上、分解するかどうかを詰めて考えないといけない。
- 中期目標の中で、専門職大学が育成する人材の記載があるが、2(1)ア、イ、ウを全て満たす人材を育成しなければならないはずである。しかし、(1)の標題がア、イ、ウを正確にまとめた人物像の表現になっていないので、一人の学生がア、イ、ウのどれか一つを満たせばよいのかという誤解を招きかねない。(1)の標題に、アからウを全て包含するような記載に変更し、その中身をブレイクダウンして、ア、イ、ウの側面があるというように表現を修正すべきである。

- 県立大学の記載に合わせているためそのようになっている。

- 県立大学とは学部の構成が大きく異なる。多様な学部を擁している県立大学の場合は、一人の学生が1(1)のア、イ、ウの全てを満たす人材を育成するということには必ずしもならない。

中期目標の前文にアンブレラ方式を採用する意義として、教育研究の高度化や相乗効果を書いているが、県立大学と専門職大学で重なり合う部分はほとんどない。兵庫県が設置者として大学をつくったのであるから、効率的・効果的な運営体制としてアンブレラ方式を採用したことについて記載すべきである。

- 国立大学でアンブレラ方式を採っている東海国立大学機構の中期目標を参考した。もう少しオリジナル性を持たせるように修正する。
- 北海道国立大学機構を参考にするとよい。
- 今後の評価委員会では、専門職大学に関すること及びアンブレラ方式によ

る法人運営についても評価をしなければならない。委員がしっかりと評価できるような目標にしてほしい。

組織体制として、各大学に大学理事会を新たに設置すると記載があるが、現在の法人理事会とは異なるのか。

- それぞれの大学に大学理事会を設置し、理事会審議事項のうち、各大学に関する案件について、あらかじめ実質的な審議を行った上で理事会に報告することにより、円滑な理事会運営を行う。法定の理事会は法人理事会の1つであり、最高意思決定機関は法人理事会である。
- 2つの大学を束ねる法人理事会の役割を明確にするべきである。
- 立命館とAPUの関係性に似ている。理事会構成でいえば、APUの代表者の方が少ない。少数大学の意見を審議する場合に、多数派によって決定が左右されるという問題があった。歴史や伝統がある県立大学と力関係が異なるので、理事会運営は難しい。少数大学の意見を尊重できるようガバナンス上の配慮が必要である。例えば、個別大学の権限や学長の選出方法などバランスをとる必要がある。
- 総合大学と専門人材育成の少人数大学ということで、組織の大きさが全く異なるので、最終的に法人理事会だけで決定してしまうと、専門職大学の意見が通らないこともある。各大学の固有の問題については、大学理事会で決定したことを尊重していく。また、学長の選出については大学ごとに選出していくので、大が小の人事には介入することにはならない。最終的に、財源や組織的な部分については法人理事会で決めていく。
- 予算は最初から各大学に配分されるのか。
- 県からの運営費交付金は法人に交付されるが、積算上はそれぞれの大学に分かれる。
- 予算、決算はそれぞれの大学でみるのか。
- 決算は法人として1本でうつが、内訳は出てくる。
- 現在も1本なのか。
- 県立大として1本である。
- 地域を豊岡に設定し、学長を平田オリザさんにするというので、非常に特徴のある大学である。平田先生の個性が大学を引っ張り、クリエイティブな面に期待ができる。しかし、数年後パターン化していることが予想させる。豊岡縛りがなければ他の地域で、平田先生縛りがなければ新たな先生呼んで、新たなことに挑戦できるが、それが難しい。専門職大学がサステナブルな大学となるように、最初から仕込みを入れておく必要がある。
- 将来的に、芸術文化と観光の2学部に分けるという発想や1学部で2学科にするという発想もある。アンブレラ方式で運営するにあたって企画部門が

重要になる。つまり、常に仕掛けを考える部隊が必要である。県から大学に職員が派遣されているため、ブランディングや法人としての一体性、戦略、ファカルティマネジメントという意識が低い。大学運営においては、大学に特化した人材の確保が重要である。

- 大学運営において、私立大学は頭一つ抜けた存在であると認識している。個別の大学の足し算をするようなホールディングスでは台無しである。法人が将来構想を描きつつ、2つの大学と議論して現場を納得させながら変革を促すような経営が重要となってくる。
- 経営企画と経営管理は全く別である。新しい事業を生み出すためにクリエイティブな人材が必要である。最初は平田先生かもしれないが、ずっと依存しているわけにはいかない。次の若き狼が必要である。